

城下町都市唐津における近代以降の山当て景観の変容要因の類型化*
Typing the view through the vista after modern ages at the Bourg Karatsu*

林慎太郎**, 樋口明彦***, 高尾忠志****
By Shintaro Hayashi, Akihiko Higuchi, Tadashi Takao

1. 背景と目的

日本の都市の多くは、近世城下町を基盤として発展を遂げてきた。¹⁾ 佐藤ら²⁾の研究では、近世城下町の骨格を形作る町割には、街路を周囲の山や島、天守に向けるという手法がしばしば取り入れることが明らかにされている。こうした街路線形の設定手法は、一般に山当てと呼ばれるものであり、今日でも都市の街路景観とその延長上に眺めることのできる山は、多くの旧城下町において街路景観上の重要な構成要素となっている。

しかし、近代以降都市形成の過程、とりわけ戦後の急速な都市構造の変化の中で、城下町固有の町割による街路景観が失われつつある。このような街路は、歴史的な都市の発展の基盤であり、その景観構造の維持は今後の都市づくりにおいて重要な資源として活かせると考えられる。

本研究は、佐賀県北部に位置する旧城下町都市唐津を対象地とする。明治初期から昭和にかけて、唐津が石炭産業により賑わった事がある事実と、戦争の被害を受けることなく現在も街路形態がよく保全されていることから対象として選定した。佐賀県唐津市を事例に、山当てされた街路景観がどのような要因により阻害されたかについて整理・類型化することを目的とする。

2. 既往研究

現在までに城下町に関する研究は数多く発表されており、大きく城下町の町割の形成原理に関して研究を行ったもの、城下町を基盤とした都市の変容過程について研究したものに分類される。

前者については、宮本³⁾による近世のヴィスタを取り入れた城下町設計についてのケーススタディがある。

後者に関しては、佐藤ら⁴⁾により、官公庁設置場所と基盤となる城下町の関係および、その後の都市形成との関係を明らかにした。また、新谷ら⁵⁾の、土地利用の観点から近代以降の旧城下町都市の土地利用の変遷を明らかにしたものがある。しかし、本研究で対象としているような城下町が有していた山当て景観の変容過程に関する研究は、管見の限り見受けられない。

3. 対象地・研究の進め方

研究は、以下の手順に従い進めた。本研究の対象地区を図-1に示す。

1) 絵図の補正

城下町形成時の町割を知る手がかりとして、1670年代に作成された「唐津城郭海岸之図」⁶⁾がある。この絵図には唐津城下町の町割が詳細に描かれており、平成17年の白図の都市計画図と重ねても線形が一致する街路が未だなお数多くしていることが分かる。このことから本絵図を城下町形成時の街路地図として用いることとし、都市計画図上に先の絵図を重ね、全体が一致するよう絵図の縦横比を変え、補正を行い比較を行うこととした。

2) 近世城下町形成時の街路の割出

重ね合わせた2枚の地図から、個々の街路について、城下町形成時期と現在まで、線形がほぼ同一であると考えられる街路を抽出する。また、合わせて消失した街路も特定する。

3) 山当て景観軸調査

城下町の設計手法で用いられる山当て・グリッド・軸線城郭や櫓などへの眺望、これらの配置を図面の分析と現地踏査により解読する佐藤らの手法⁷⁾に従い城下町形成時に山当てされた街路の割出、およびその街路の格を調査する。なお、本研究において、山当てとは、街路や堀の軸を周囲の山や島などに向けて設計することを定義とし、山当て景観とは、山当てされた街路や堀からの眺望と定義し用いる。

① 2)で抽出した各街路について現地踏査を行う。都市計画関係資料分析により、抽出した各街路について今日、山当て景観がどの程度保全されているかを写真などで記録する。

② ①で調査した街路の中から、景観阻害が認められ

* キーワード：山当て、景観、城下町

** 学生員 工学 九州大学大学院工学府

〒812-8581 福岡市東区箱崎 6-10-1

TEL: 092-641-3131 (8677) FAX: 092-642-3309

*** 正員 Doctor of Design 九州大学大学院工学研究院

812-8581 福岡市東区箱崎 6-10-1

TEL: 092-641-3131 (8677) FAX: 092-642-3309

**** 正員 工修 九州大学大学院工学研究院

〒812-8581 福岡市東区箱崎 6-10-1

TEL: 092-641-3131 (8677) FAX: 092-642-3309

たものについて、その要因の整理・分類をおこなう

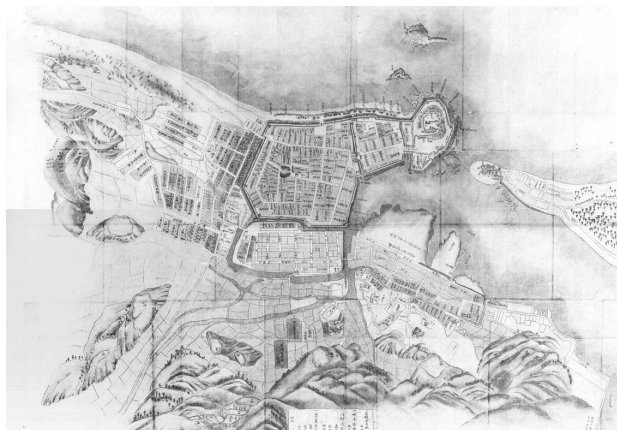


図-1 唐津城郭囲海岸之図

4. 山当てされた街路の抽出

絵図と都市計画図を整合させると図-2 のようになる。対象地内の城下町形成時に既に存在していた街路のうち80%以上が今日もほぼ同じ線形で存在している。

城下町の街路のうち山当てがなされたと考えられるものを3)の方法で抽出すると図-3、および図-4のようになる。図-4中の北-①、②は、北方向の鳥島へ軸線に向けて山当てされたと考えられる街路である。これらは、鳥島に軸線に向けて作られた肥後堀に平行に走る街路である。南-①～⑦は、南方向の丈高山へ軸線に向けて山当てされた街路であると考えられる。これらは、丈高山に軸線をむけて作られた大手門を出て、町田門への街路、もしくは、それに平行に沿って作られた街路である。東-①～④は、東方向の鏡山へ軸線に向けて山当てされた街路であると考えられる。これらは、鏡山に軸線に向けて作られた外町と東の寺町の間の堀に平行に走る街路である。西-①、②は、西方向の丈高山へ軸線に向けて山当てされたと考えられる街路である。これらは、丈高山に軸線に向けて作られた名護屋門を出て、呼子へと向かう街道、または、その街道に平行に走る街路である。



図-2 絵図と現代の地図の比較

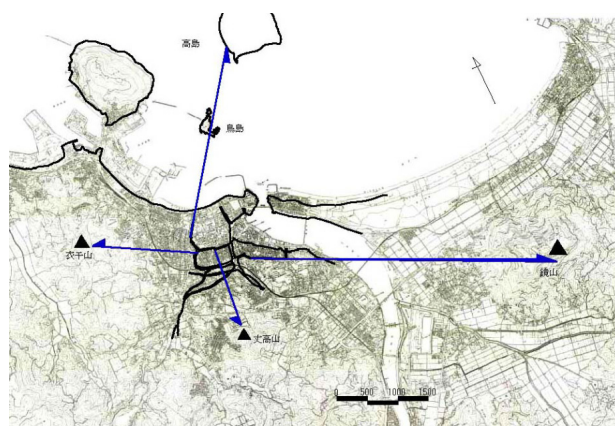


図-3 唐津の有する東西南北方向の軸線

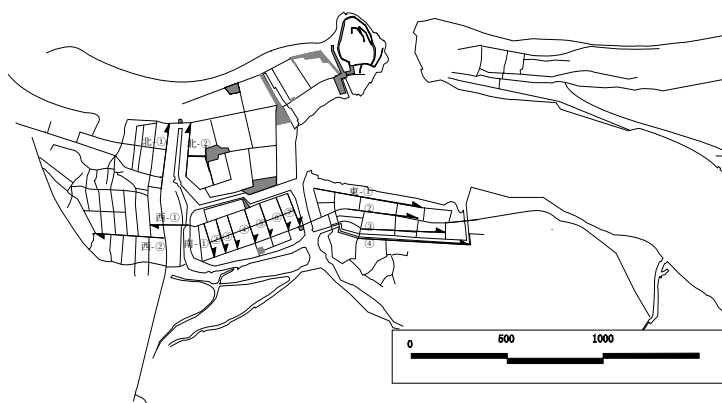


図-4 抽出した山当て街路

5. 近代以降の街路景観の変容過程とその要因

4. で特定した全15本について調査を行った。15本の街路のうち紙面の都合上、特徴的な南-④、⑥、東-①、④番の街路について現状を調査したところ以下のような阻害要因が存在することが明らかになった。山当て景観を変容させる要因を6. で整理・分類する。

1) 南-④

呉服町と米屋町の間を抜ける街路であり、その変容過程を図-6に示す。この街路は城の大手門に直結する町筋で唐津大町年寄りの石崎氏はこの町の主人であった。名護屋六坊のひとつである安楽寺がある。

街路軸は南の方向の丈高山を向いている。明治期に入り、町田門が消失し、その南側の堀が埋め立てられ、その場所に北九州鉄道が開通した。また、街路は江戸期より魚屋、御用船問屋、酒屋、薬屋、質屋など様々な店舗が立ち並ぶ、商業が盛んな通りであり、鉄道の開通により駅前の商店街としてさらに発達した。その商店街は昭和39年にアーケード化された。また、昭和57年には、交通渋滞解消のために駅が高架化された。それから平成に入り、駅裏の低層の住居が立ち並ぶ地域にマンションが相次いで建設された。

現在もこの通りは、商店街であるため自動車が侵入することができず、アーケードが大きな景観阻害の要因となっている。

2) 南一⑥

本町と中町の間を抜ける街路であり、その変容過程を図一7に示す。職人が半々ほど居住している。土居氏の時代には他藩からの公的来客や幕府の役人の宿泊した御使者屋があった。

軸は南方向の丈高山を向いている。昭和30年代になると南に一直線に伸びていた街路線形が鍵型に折れ曲がったように、その線形変化に伴い街路軸線上に民家が立地した。さらに昭和57年に鉄道の路線が高架化され現在に至る。

現在、この通りの両側に、3階以上の建物が軒を連ねている。

3) 東一①

材木町に面した街路であり、その変容過程を図一8に示す。材木町は材木、竹、薪、木炭についての売買の特権を持った町で船大工棟梁や船鍛冶も多く住んだ。

街路軸は東方向の鏡山方向へ伸びる。松浦川の上流より砂が運ばれるため、徐々に河口部付近である河岸に砂が堆積していき、その体積地の上に自然と民家が立ち並ぶようになる。明治30年代になると街路を馬車鉄道が通るようになるが、昭和初期に撤廃される。以後、街路の沿線で土地利用に大きな変化はなかったが、平成に入り、高層マンションが建つことになる。

現在、この通りは、2車線の幅員を持つ道路となっており先を見渡すことが可能である。

4) 東一④

江戸時代には水路であり、現在は埋め立てられ街路となっている。その変容過程を図一9に示す。当時、町田川からの流れの一部は東寺町と下級武士達の住居の間を通り、松浦川に流れ込んでいた。

水路の軸は東方向の鏡山を向いていた。明治期に街路線形が変化し、鏡山への眺望が開けた。明治期に入り、水路が埋め立てられ街路が拡幅した。昭和2年に外町小学校が開校し、平成15年にその小学校の北側に隣接する形で高層マンションが建設された。道路の幅員が車2台分程度あり先まで見渡せるが、鏡山付近のマンションが大きな景観阻害要因となっている。

凡 例			
記 号	意 味	記 号	意 味
◎	対象物	++++	線 路
▲	視 点	■■■■	高架線路
■	構造物	+=	駅 舎
□	田畑、空地	-----	視 線

図一5 凡例

	城下町形成時	明治30年代	昭和39年	昭和57年	平成5年頃
平面図					
透視図					

図一6 南一④変容過程

	城下町形成時	昭和2年頃	昭和30年頃	昭和57年
平面図				
透視図				

図一7 南一⑥変容過程

	城下町形成時	明治30年代	昭和初期	平成10年頃
平面図				
透視図				

図一8 東一①変容家庭

	城下町形成時	大正10年頃	昭和2年	平成15年
平面図				
透視図				

図一9 東一④変容過程

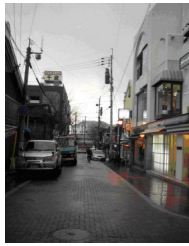


写真1：南-④



写真2：南-⑥



写真3：東-①



写真4：東-④

6. まとめ

城下町都市唐津は、城下町の設計時に松浦川に浮かぶ州を利用してできた土地であるということより、街路の向きを決定づける堀や水路の軸を意図的に周囲の山や島に当てていることが推測される。また、武家地においては、防衛を優先して見通しの良い街路設計はなされておらず、反対に町人地においては、山当て景観を有する街路が見られた。これら、意図的に山当てをすることを目指すように設計された街路は東西南北の四方向のいずれかにその山当ての対象物となる山ないしは島を持っている。それに派生する街路もまた、山当て景観を有することとなった。

山当て景観を変容させる要因を a)街路線形, b)前面の二つの観点およびその因子の性質より整理、類型化すると図-9 のようになる。現在の街路はこれらを組み合わせることで成り立っている。

	民間施設	公共施設	
		建築物	土木構造物
正面			
街路線形			

図-10 景観阻害要因の類型化

謝辞

本研究の調査に当たり、唐津市役所の都市計画課大森様、文化課田島様、岩尾様、企画調整課櫻庭様には、大変ご協力を頂きました。厚く謝意を表します。

参考文献

- 1) 佐藤滋：城下町都市の戦前の街路計画と都市的拠点との関連，日本都市計画学会学術研究論文集，No28,1993年，pp229－234
- 2) 佐藤滋：図説城下町都市，鹿島出版会，2002
- 3) 宮本雅明：近世初期城下町のヴィスタに基づく都市設計－諸類型とその変容，建築史学，6号，pp.72-103，1986
- 4) 佐藤滋：近世城下町を基盤とする地方都市の近代都市づくりに関する研究 その6 近代都心の形成と官庁街～事例4都市の場合，日本建築学会大会学術講演梗概集 F-1 分冊，1996年，pp.731－73
- 5) 新谷洋二：近世城下町の都市的変貌過程に関する研究，土木史研究発表会論文集，21巻，159－168，2001年
- 6) 日本城下町絵図集，昭和礼文社，1985年
- 7) 唐津市：唐津市史，1962年
- 8) 唐津市：第一次唐津市総合計画，1970年
- 9) 唐津市：第二次唐津市総合計画，1979年
- 10) 唐津市：第三次唐津市総合計画，1986年
- 11) 唐津市：第四次唐津市総合計画，1994年
- 12) 唐津市：第五次唐津市総合計画，1998年
- 13) 唐津市：唐津歴史号，1994年
- 14) 文彦：見え隠れする都市，鹿島出版会，1980年
- 15) 財野博司：都市の町割，鹿島出版会，1989年
- 16) 樋口忠彦：景観の構造，技報道出版，1975年
- 17) 藤本利治：近世都市の地域構造，古今書院，1976年
- 18) 前掲載 1)